

終戦とシベリア抑留

鳥取県 廣瀬 重雄

六十万人を騙し続けてシベリア連行、「今日も暮れ行く異国の丘に……」や「岸壁の母」のメロディーを聞く度に、過ぎ去った五十年も昨日のここのように思いが甦る。引揚船上から見えた舞鶴湾の松の緑が鮮やかに脳裏をかけ巡る。

終戦の詔勅を平壤飛行場近くの第三中学校の校庭で、聞き取りにくいラジオ放送で聞いた。

八月九日、ソ連軍が満州及び北朝鮮の日本海側に侵攻しつつあった。いよいよこの世におさらばと観念せざるを得ない状況下であった。デマ放送（ニューデリー放送）ではいろいろと聞いているが、まさか戦争に負けるとは考えられなかった。翌日よりいろいろな出来事が起こった。原田少尉殿が裏山の小高い丘で自決されたり、少年飛行兵出身で私達の先輩であった方

が、制止も聞かず発進した戦闘機で飛行場東端に自爆した悲しい出来事があった。終戦から九月八日の武装解除の日まではなすこともなく、ただのんびりと帰国の順番を待った。終戦の折、中隊長より、全員揃って帰国するからくれぐれも脱走等の事故のないようにと注意があり、それを信じて疑わなかった。今まで戦争に負けた経験やそのような教育は受けていなかったから……。

九月八日から状況は急変した。まず武器類を一カ所に集積し、身の回り品を雑糞や袋に入れて集結地三合里に向かった。途中で初めて人相の悪いソ連兵を見た。自動小銃（通称マンドリンと呼ぶ）を持ち、警戒している。時には銃口を向けながら、時計や万年筆を強奪された。腕には何個も腕時計を連ねて得意そうにしている。数台もの十輪車（アメリカ製スチュードベーカー）の軍用トラックが行き交った。この頃になると本当に戦争に負けたと認識させられた。

三合里の収容所は既に多くの人々が有刺鉄線を張りめぐらされた中にいた。三万人とも四万人ともいわれて

いたが、帰国の順番待ちとの説明だった。十一月初旬、帰国のためと称して列車で日本海側にある興南港に移動した。一千人の大隊を組織して引揚船を待った。それがソ連側より流される騙し情報の第二回目くらいだ。宿舎は日本室素の空社宅で、四・五畳に十五人くらい詰め込まれ寝返りもできない。夜、用便に出ると帰っても寝場所がない。重なるようにしているといつの間にか割り込んで寝ていた。もちろん空腹だ。

玄米と牛肉を支給された。玄米を一升瓶に入れて棒で搗き、飯盒で炊く自炊生活だった。お菜の牛缶は最初はご馳走だったが、日が経つに従い缶の臭いが鼻につき、大閉口した。しかし、食べない訳にいかない。五十年を経た今でもその臭いが好きになれない。

十二月二十日頃、待ち望んだ乗船命令が出た。その折、汚れたり破れた衣服で帰国させるとソ連の体面にかかわるとのことと親切？にも新品の防寒服・靴・帽子が全員に支給された。心は既に帰国の喜び一辺倒。何ら疑う余地はなかった。出港して何時間航行しても進路の左側に朝鮮の山並みが望見される。北進し

ているのだ。三日目くらいに港に入って行く。近づくに従い建物に書いた日本文字の看板が見えた。「住友倉庫」「三井倉庫」と大書きされた大きな倉庫で、それぞれに「ウラジオストック」と地名も書いてある。それでもまだここから「東京ダモイ」だと騙し続ける。停船中、陸地側より日毎に氷が張りつめ迫って来た。

昭和二十一年元旦はウラジオストック港内の船の中で迎えた。何もない正月。やがて船は氷に閉ざされ身動きできない。このまま春を待たねばと思うと何ともやりきれない。心の焦燥感と不安感は今でいうノイローゼか、氷の上にも飛び下りてしまいたい心境だった。

一月十日頃、急に船が動き出した。分厚い氷を割りながら出港した。度々の欺きもこれで終わり、ようやく帰国が叶ったと皆で喜び合ったが、しかし、船上の各所にはマンドリンを持ったソ連兵が厳重に監視している。翌朝、用便のため甲板に出ると、相変わず左側に雪を被った大陸が見える。北進している厳冬の日

本海の大波に五、六千トン級の貨物船は木の葉のように揺れた。船酔いのため、身動きできず吐く物もなくなり、ただただ揺れに任せてゴロゴロするだけだった。帰国の夢破れ諦めの心境になった。帰国を餌によくも騙し続けたものだ。特に妻子ある年配の方達の心境は計り知れない不安の毎日であったと思われる。

一月十五日、氷の張り詰めた湾内に入って行った。

やがて氷に阻まれ航行が止まると千メートルくらいも後退し、情力をつけて氷海に進進。四回くらい繰り返して停船した。直ちに下船せよとのこと。一千人が氷上に整列。積み荷もほとんど船の周りに降ろされる。氷が割れたら氷海の藻屑となること間違いなかった。しかし北海の水は頑丈なものだった。以前に通った船の碎氷でゴツゴツした氷の上を三時間くらい歩いて日没後、収容所にたどり着いた。当地の日没はこの時期午後三時頃か、途中滑って転び、氷の角で頭を打ち数人が落命された。その一人に班長だった小中谷貢さん（出身地不明・軍曹）もおられた。

収容所は元ソ連軍の兵舎で設備は一応整っていた。

一昨年墓参りの折、収容所跡を訪れ、一部現存する建物があり、数カ月を過ごした二階の窓を眺め、感無量だった。現在ロシア人が三世帯ここで生活していた。抑留死没者の墓地は後方三百メートルくらいにあった。終戦直後に入ソされた方達は自分らで収容所を建てられたとのこと。現在も建物は現存し、ここでも数世帯が生活している。

ついでに、この建物の思い出がある。入江を見下ろす丘の中腹で、現在は眼下にシベリアや有数の船舶修理工場があり、大きなドックがある。当時は民家の点在する小さな寒村だった。入ソ間もなくトラックに乗せられ、チボリ（収容所）からここに来て、建物の玄関脇の医務室で身体検査があった。

検査官は身長一八〇センチ、体重九〇キロ以上もある堂々とした体格の金髪の女医さん二人。私が禪一つで前に立つと一人の女医さんが私の背中を指して、もう一人の女医さんと何やらひそひそ話しているが、もちろん言葉が通じるわけがない。上手でない通訳を呼んだが全く要領を得ない。手真似で背中のお灸の跡は

何かということらしい。通訳もお灸のことは全く知識がない。私がお灸を据えたと病気になるまいと説明するが納得しない。お灸の説明に一苦労だった。傍らにあった脱脂綿でお灸の形をつくり、腹につけて火をつける真似をしても、そんなことはできないと言う。どうしても納得しない。結局三〇分くらい私一人に費やし、しまいにはこにこしながら握手して退室した。

早速、伐採や道路作業の重労働に空腹を抱えて従事した。

まず出発前の人員点呼だ。百人くらいの作業班を編成。十列縦隊に並ぶ。1（アジン）、2（ドワ）、3（テリー）と数えているが、少しでも動いたり話をしたりすればまた一から数え直す。時間がかかり大変だった。その間もマンドリンは肩から離さない。兵隊の階級は下士官級だった。人員点呼に限らず、いつの時でも数字には大変に弱いと見た。

ようやく点呼も終わり、それぞれの作業地に出発だ。わざとではないが早く歩けない。監視兵は、「ダ

ワイ、ダワイ（早く、早く）」と急ぎ立てる。いつの頃からか軍歌ならぬ「解けて流れてノーエ」と「ノーエ節」を歌いながら歩いた。すると案外と楽に歩ける気がする。それにしても先頃までの帝国軍人の行進が滑稽に思えても、これが現実だった。

作業は直径六〇センチ以上もあるカラマツ、モミの木が多かった。二人で引き合う鋸（ビラー）で伐り倒す。それを六メートルくらいの長さに切断する。二本の太木を倒し、切断してノルマ（定量）百パーセントだ。空腹で力が入らず、鋸の歯をかまれても、太木ゆえなかなか取れない。ノルマ達成は容易でなかった。倒木の下敷きで犠牲になる人もいた。何しろ素人木挽だから、どちらに倒れるか木任せだ。太木の倒れる様は物凄い。周りの風を呼び、吸い込まれそう。倒す前に大声で近くの人達には注意するが、防寒衣服の着ぶくれと栄養不足で動作が鈍い。平成八年墓参の折、ムリー（シベリアの大山脈中にある）の墓地近くの伐採跡を見たが、巨大な切り株が沢山あり、案内をされた町長さんが、日本人（抑留者）が切った切り株だと説

明されていた。

北海道出身で年配の方が、寒い地方の松の実は大きくて食用になると話された。これは良いことを聞いたとその機会を狙っていた。機会は案外と早く訪れた。伐採作業の休憩を利用し、予め松笠の沢山ついた木を見つけていたので、道具があるので早速伐り倒した。直径四〇センチくらいで、伸びが良い五葉松。松笠も沢山ついている。大きさはソフトボールの球より大きいくらいで、玉子型をしている。内地にある実の五、六倍以上もある。早速五人で手分けして持ち帰り、実を取り出そうとしても硬くて駄目、それでは焼けば良いとのこと、それでも駄目だ。結局、くたびれもうけに終わった。そのことで監視は何も言わなかったが。入ソ以来、主として黒パン、現在の六つ切り食パンの一枚分より小さいもの、それに家畜用のえん麦のひき割りを数時間炊きつめた糊状のスープを飯盒のふたに半分くらい、その外の物を食べた覚えがない。零下三〇度を下るシベリアでの栄養不足は、一千人で入ソした私達の大隊で二百人に近い犠牲者を出した。野菜

不足から壊血病になる。手足の関節が硬化し、足を伸ばして寝ると、朝しばらくは曲がらない。曲げて寝ると伸びない。ひじの関節も同じこと。また全身に赤い斑点がいつぱい出た。日本では全く見ることはない。春先になると川辺に三つ葉によく似た美味しそうな野草が生える。しかし、それは世界の三大毒草ともいわれる物だ。それを食べて食中毒を起こしたり落命する人もあった。雑草のアカザは当時、野菜不足を補う貴重品だった。またキャベツの下葉（ロシア人の取り残した）も大切な食糧だ。一番食べにくいのはジャガイモの生を食べることだったが、それでも食べていた。

昭和二十一年五月、十キロメートルくらい離れたところの新収容所に百二十人くらいが移動した。ここは日本海側でも指折りの火力発電所があり、作業は従来とあまり変わらないが、三カ月に一回くらいの割で三千トン級の石炭船が入港した。その時は、収容所全員三交替で荷降ろし作業に動員された。五日間くらい、連続作業である。貯炭場は岸壁近くの広場で、野積みされた。私は、八人でそれを三〇メートルくらいの高

台にある発電所の貯炭場に送る作業。八トン積み貨車二両に積み込み、荷降ろしがノルマだった。普通の体力ならば二時間くらいで済む。しかし、それをあまり早く終わらせるとノルマが上がる。つまり人員を減らされる。八時間労働の大原則があるからだ立っていることもならず、遊んでもいられない。全く厄介な制度と感じた。監視は青い目、金髪のロシア婦人。三十歳くらいのなかなかの美人だった。後で聞いた話では、彼女も囚人でウクライナから送られて来ているとのこと。強制労働用に送られて来たのだろう。日が経つにつれ片言のロシア語で話せるようになり、作業も大変やりやすくなった。

時折、工場長も現場視察として巡視に来た。日本の生活等いろいろと話が聞きたいようだった。彼もモスクワやソ連の話を持ち出して話す。それを手振りを交えてだから時間がかかるが面白い。人間関係が良くなると、早く終わったらアデハイ（休憩）しても良いと言ってくれた。

午後になると魚取りや、日陰で長い休憩もできた。

ロシア人は軍人は別として個人的偏見はなく、差別的言葉や態度は全く感じられず、好感が持てた。そうした日時の経つ間にもいろいろな会話もあった。

ある時、発電所内を見学させてくれた。説明者もいる。巨大なタービンや発電機等の機械類を指して、これはモスクワから来た物だ、優秀だろうと誇らしげに説明する。機械ごとについているプレートには、「日立製作所」と書いてある。工場に入るとすぐ日本製だと分かっていた。ヤポソ（日本）にはこのような機械はないだろうと得意だ。言いにくかったが、プレートを指してこれは日本製だと言うと「スターリン同志が送ってくれた機械だ」とむきになって反論する。ほどほどにして論争を止めた。また他の一人は荷物運搬用のエレベーターを、ヤポソにはこんな便利な機械はないだろう、モスクワから来たと同じように話す。プレートは「日立製作所」だ。恐らく戦前、日本から送られた発電プラントだろうが、この地に動いているとは思いの外だった。それにしても戦勝国の優越意識が無知なのか、はたまた愛国心がそう言わせるのか……。

抑留中一番辛いことは空腹だった。これは、六十万人抑留者が共に体験された、まぎれもない事実であろう。収容所内の話題は専ら食べ物のこと。若い男性ばかりなのに色気の話は全くない。論争の種はぼた餅とおはぎ。関東はおはぎ、関西はぼた餅の主張が多かったように思う。諺にある「棚からぼた餅」は全国共通なのに。また一説には、おはぎはこし餡、ぼた餅は粒餡。別の説では、おはぎはウルチ米と餅米の半々をこねて餡をつけたもの、ぼた餅は餅に搗いて餡をつける。諸説いろいろであったが、いずれも話すことによって空腹を紛らす知恵だったのかもしれない。

二十二年春頃になると思想教育が重要課題になった。少しでも反動分子と睨まれると帰国がおぼつかなくなる。帰りたい一心で聞きたくもない話を真面目な顔で聞き、歌いたくもない「インターナショナル」等を大声で歌わされる。その指導者は同じ抑留者仲間、ソ連側に選抜された人だという。講話中居眠りや私語でもすれば、反動分子としてつるし上げられる。帰国という良い餌の前には従わざるを得ない。いつ帰

国できるかわからず情報もなく、連絡も全くない世界で希望も持てぬとは。経験はないが、無期懲役よりまだ厳しい焦燥に明け暮れた二年間は、たとえようのない長い月日に感じられた。

二十二年六月頃からロシア人から帰国の噂を聞くようになった。が、また一般ロシア人からも騙されるのかと思いつつも信じたかった。いや信じよう、信じよう。七月下旬突然、「明朝荷物をまとめて集合せよ」と命令があつた。着のみのままだから荷物をまとめる手間はかからない。また騙されるのかと思いつつも命令に従うしかない。噂が本当であることを祈る心で、軍用トラックでソフガワニ港に着く。思えば、二十一年一月、ここの沖合いで氷上に降ろされて以来、幾度か生死の境をさまよう困苦の生活を過ごした。よく今まで生き延びてこられた事実には感無量であった。波一つない真夏の港内には貨物船ながら一回り大きくきれいな船。やはり気持ちの故か。間もなく乗船開始、相変わらず人員点呼に時間はかかった。夕方近く出港した。やがて次々と甲板に上り外を眺めている。

米るときは左側に見たシベリア大陸も今は右側に見える。間宮海峡を南下している。安堵した顔々、監視のソ連兵、時たま見かけるにこやかな顔で雑談している元日本兵もいる。行き先を聞くと即座に「ナホトカ」と答えた。内地への出港地だ。現地発行の『日本新聞』で承知している。三日目の朝方ナホトカ入港。各地から集結した抑留者も多く、数多くのテントが立ち並んでいる。私達も仕上げの思想教育が行われ、次々にテントを移動し、帰国の順位獲得に一生懸命、真面目な優等生になろうと頑張った。もし反動分子と睨まれたら再び奥地の収容所に送られるとのこと、何よりも恐いことだった。

八月十日頃、日の丸の旗を船尾に立てた大きな船が入港している。船上には日本の看護婦さんが二人見えた。日本人の顔だ、船員さんも日本人の人だ、帰国できる。内地から迎えに来た引揚船に間違いはない。もう騙されることはないだろう。騙し続けられた二年間が終わった。数日間航行の朝方、甲板より「内地が見えたぞー」の大声に船倉の人達も一斉に甲板に出た。船が

転覆しないかと思われる程の人の波となった。舞鶴港が近づくにつれ、湾頭に見える松の緑が目に痛い程染み込む。五十年を経た今でも、鮮やかに脳裏に甦る抑留二年。生きて故国に帰れた幸運を神や故国に感謝する。抑留者では最年少者だったが、あの過酷なシベリアの気候や重労働に耐えて……。

平成八年六月二十一日～二十九日まで、全抑協の呼びかけにより慰霊墓参に行ってきた。不幸にして帰国を果たせず無念の死を遂げた戦友や多くの抑留死没者の墓参は、以前から考えながら実現しなかったが、今回は抑留地も計画に入り、この機会とばかり参加させていただいた。墓地とは名ばかり、山の中・草原・白樺林の中等で窪んだ所や土が少し盛り上がった所で、現地のガイドさんの説明でやっとわかる所が大部分だった。訪問地はハバロフスク州。広いシベリアから見ればほんの一部分だが、他の地区も大同小異の状況と思われる。都市近郊の墓地では以前に墓参された墓標等も見受けられたが、それにしてもそれはほんの一部の墓地のみ。何百ともいわれる墓地、早い機会の整備

を願う。同胞や肉親の全く訪れたこともないところに淋しく眠られたまま、何ともやり切れない思いである。

私がいたソフガワニ墓地は当時ボツボツと小さな木が生えていたが、今では白樺やモミの木が大木となり、昼なお暗い密林状になって五十年の歳月を感じさせた。この墓地は訪れる墓参の方も多く、墓標も多く建っている。また湿地状の墓参道には板敷きの立派な墓参道が造られ、墓地周囲は柵囲いがあり、どなたが造られたか感謝しつつ、先述の上司や同僚の方々の慰霊をさせていただいた。ここはテレビの気象情報の時、右上方の元樺太（五十度線）の大陸側。今日は晴れ、今日は寒いと思いつつ見ており、特に冬季は気にかかる。一昨年の墓参は、ハバロフスク・コムソモリスクリムリ・ソフガワニの都市及びその周辺のコースだった。同行の皆様と夕食の折、明日は私の第二の故郷で東洋のベニスともいわれる風光明媚なところだと大げさに紹介すると、そんなところはシベリアにはないと反論が多かった。しかし、皆様もなるほどと感嘆

されるほど、内陸部と違って見えたようだが、冬は冬とも変わらず、やはりシベリアであった。シベリアで大部分を過ごした発電所近くの丘の上（元収容所跡地）から作業を続けて、発電所や埠頭を望見し、二度と見ることもないと諦めの地を訪れたことは幸せだった。当時の監視（先述）の二人もふっと思いついたが、あのと三十歳前後だから今では八十歳、ロシアでは平均寿命五十歳ともいうから、現世の人でないかも知れない。

抑留時、私達は時計・万年筆等目ぼしい持ち物はないが、鉛筆、手鏡等は大部分の人が持っていた。ロシア婦人はこのような品物を大変に欲しがっていた。向こうから求め来る交換条件は、半分くらいの鉛筆で黒パン一斤（食パン一袋くらい）。中には三本に切って交換する知恵者もいた。万年筆は黒パン一本（三袋分くらい）。手鏡は貴重品だ。黒パン三本にもなる。彼女等はそれを目を分けて分割払いする。それを忠実に支払ってくれる。それ程ソ連では物資が乏しかった。我々には一時的にせよ、空腹を満たすこと

ができて大変有難く好都合だった。

墓参の折、そのことを思い出し、発電所近くに小さな小学校があったので、お土産のつもりで普通のボールペンを六ダースを携行したが学校は見当たらない。発電所の拡張とともに部落も大きくなって、どこかに移転したらしい。渡す機会がなくなったボールペンは通訳に託し、「良きに計らえ」と渡して帰った。

新潟からハバロフスクまで一時間五十五分で、定時着陸。終戦当時は地の果てのように感じた所がこんな短時間で訪問できるとは、世界も近くなった。ホテルで夕食、小憩のあと通訳同行の夜行列車で北東三百キロメートルにあるコムソモリスク市に向かう。ここはシベリア第二鉄道建設の拠点として、五万人ともいわれる抑留者が数百キロメートルにわたり散在する収容所の中心地。枕木一本に死者一人ともいわれる程過酷な労働を強いられたと聞く。早朝到着、市内に入ると、メイン道路に面して八〜十階建の労働者住宅が何十棟も建ち並ぶ。

なるほど、労働者優遇の国だったことがうかがえ

る。ホテルで小憩の後、早速墓参に向かう。市場で供花を買う。貸切バスで一時間くらいで草っ原の中にある墓に到着。慰霊祭を行った。途中で、抑留者が建設したシベリア第二鉄道を徒歩で横切る。もちろん道はない。

次々と墓地を訪れ、線香を手向け、慰霊する。途中、日本人が造った水道設備を見る。建物や器材は朽ち果てている。数カ所の墓参を済ませてホテルに帰る。昨夜は夜行列車、早速入浴とする。しかし浴槽の栓がない。それはまだしも、熱湯は出るが水が出ない。係に言うと、故障で断水だと平気な顔をしている。翌日は水は出るが湯が出ない。今日も故障だと言う。結局、辛抱しながら体を拭くだけで二泊したが、入浴はできなかった。人口三十万人の都市の一流ホテルがこの状態。前々年に来た人が、今回はまだ良い方だと話されていた。

ソ連崩壊後の混乱が今でも生活や物資不足に続いているとのこと。当地方は今が盛夏、三十五度くらいになる。クーラーはなく、窓を明けて寝ると、朝方は寒

いくらいで爽快だった。食事は三食ほとんど同じメニュー。食事時ビールを注文すると個々に前金払い、お陰で飲み残しはない。日本でもお手本にしたらどうかと思った。

供花を求めて市場に行くと沢山の花売店がある。墓参団と見るとあちらの人も心得ていて商売をする。たちまち完売となる。価格は日本より三割方くらい安い。ある市場でヒロセ（中国の発音記号）と大声で呼ぶ、顔見知りはいないはずだ。考えて見るとロシア字と日本語の名札を胸につけている。皆で大笑いしたお陰で、野イチゴ様の物を買った。前述の貸切バスはいつボンネットが吹き飛ばか分からない。それでも地道を六、七〇キロメートルで走る。市内には〇〇建設、××電気、△△食品と看板をつけたトラックを良く見る。乗用車も日本製（各メーカー車、ほとんど見る）が大部分だ。ただし、日本の車検は百パーセント通らないだろうが。当時、日本人抑留者が建てた家屋や公共建築物が数多く現存し、住宅は官吏や有名人？が住んでいた。ムリーでは日本人の建てた住宅が一街

区をなしていた。日本人の建築技術の素晴らしさをロシア人が感心していた。

当時を偲び、思い出すまま拙文を書き連ねてきたが、改めて平和の尊さをかみしめる機会となった。多くの戦争犠牲者の御冥福を祈ると共に、いつまでも続く平和を願っている。

【執筆者の紹介】

生年月日 昭和三年二月五日

昭和 十八年十月一日 陸軍少年飛行兵学校（十五

期）入校

昭和 十九年十二月 鹿児島県知覧飛行場に展開

昭和 二十年 四月 新潟県高田市（現上越市）に

て新通信部隊編成

四月二十九日 朝鮮海峡を渡る

五月 北京近郊南苑より平壤に転進

八月 終戦

昭和二十二年 八月 復員 現在に至る

（鳥取県 松下 盛一）